

8000万年前の浅い海

岩石名 アンモナイト Ammonite

時代 中生代白亜紀後期

地質区分 エゾ累層群

産出地 士別市温根別北線



解説

温暖な浅い海

士別周辺に分布する地層の蝦夷累層群は、北海道で最も有名な地層のひとつといえます。白亜紀前期から末期にかけて、古ユーラシア大陸と海溝の間に火山性の島弧が存在していたとされ、それは現在の礼文島～樺戸山地が考えられています。それらの火山は安山岩質～流紋岩質の溶岩や火山灰を噴出しており、その碎屑物（砂・泥・礫など）が海底に堆積しました。これが蝦夷累層群です。

始めのうちは深海だったこの海も、8500万年前には浅く暖かな海となり、そこには多くの生物がすんでいました。道内各地の蝦夷累層群の上部層から、アンモ

ナイトやクビナガリュウなどの化石が発見されています。

この地域でも士別市温根別や、幌加内町添牛内などで、上部蝦夷累層群の泥岩からアンモナイトやイノセラムスの古生物化石が発見さ



士別市温根別北線の河原

れています。士別市温根別市街地南方の採石場では、中部蝦夷層群の砂岩層が観察されます。ここでは炭化した植物化石が見つかり、比較的陸地に近い海の環境であったことを示しています。

～ Coffee break ～

士別市温根別に観察される蝦夷累層群ですが、世界的に有名な地層なのです。もちろんそれはアンモナイトなどの古生物化石が数多く産出するからですが、それだけではありません。蝦夷累層群のアンモナイトは、1億年近くの年月を経ているにもかかわらず、「殻」が保存されているのです。このように保存の良い化石は世界でも珍しく、注目を集めているのです。アンモナイトの殻は炭酸カルシウムでできており、酸性の液体にはすぐに溶けてしまいます。中生代から炭酸カルシウムが保存されているというのはすごいことなのです。大型のアンモナイトやイノセラムスが多いということも特徴です。温根別でも、昔は数十センチのアンモナイトの破片が見つかったようです。

調べてみよう

○ アンモナイトの種類を図鑑で調べてみよう。